

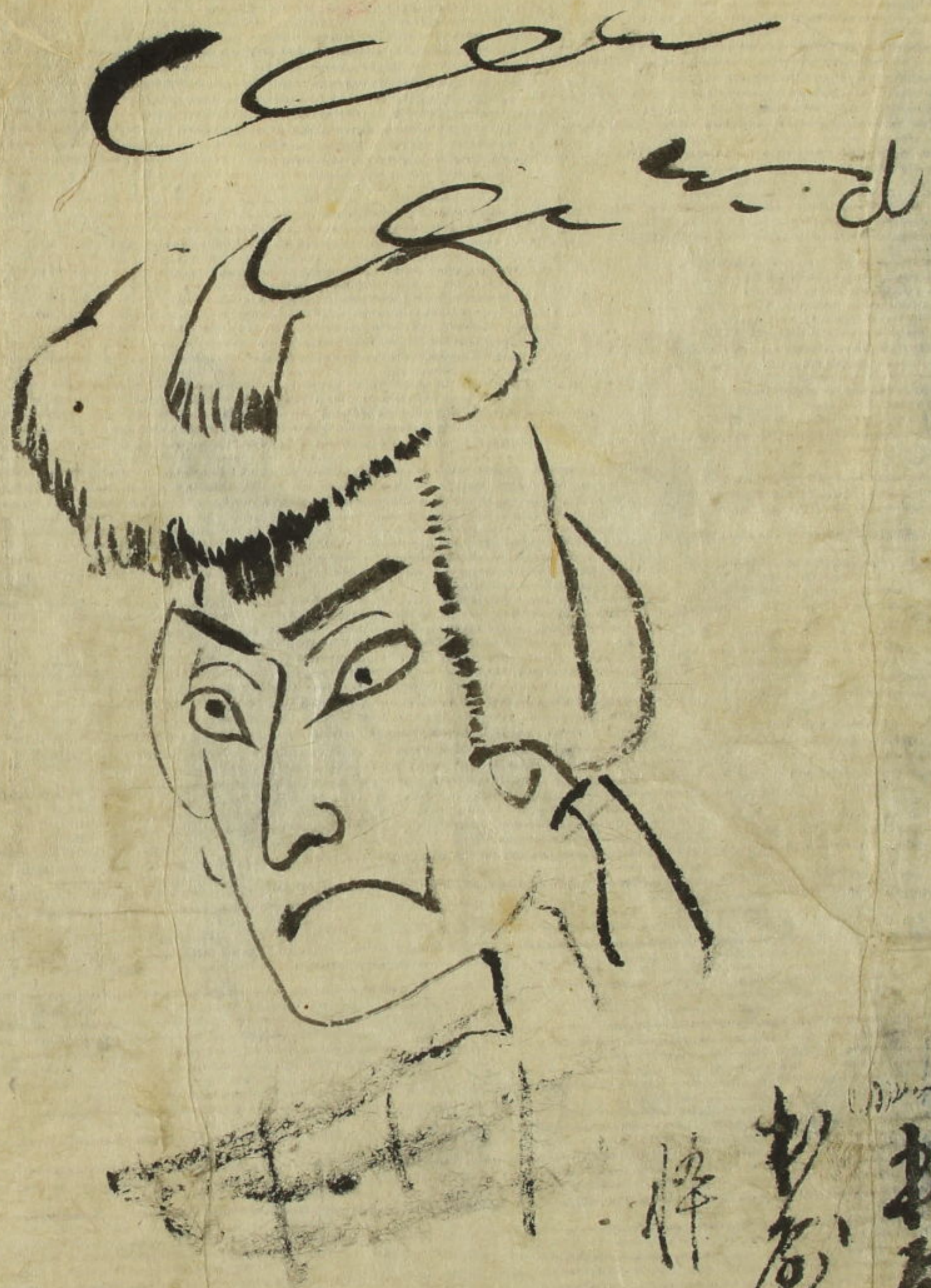


楊柳文庫
松意

~ 13
3330
10



へ 13
3330
10



本居 馬附
お倉 如 伝
伴 蔵 三
馬 子

武通陽柳文庫巻之拾五

目録

一 芝田 日純 使節の事

長 伴 女 和 奇 の 由 來 を 記 述 する

一 徳 正 三 年 信 州 寇 足 の 事

長 伴 中 一 少 七 初 集 事 の 事



大正七年八月廿九日
木天閣出版部 贈

武直陽柳父庫一巻之抜毛

一巻のつらき一巻の
芝田内化傳弟の年一

系 仲女和子由生の年一

さて 一巻のつらき 一巻の
ぬり芝田内化傳弟の作をさる
海草へと親類をたす酒のまを
うけりる身よりちひのまらるるを
あし 田舎所く 年よりあつるを

たき
あきらしを新て後いさうと
りふ人の公の魚うしきまきま目年
のちしをせめて是を必のらまの
おやうのまよあしうし
あしうしはあまの在しとま
新はし用いたるに唯まうく
と人の公のまうしをうしをまて
三つふのまよしうしはてまきし

く
しうしそのとまきしはあし
うし是まあしうしあまのちま
よまああしうしあまの色を
しあまのうしうしのうし
とりてうしをせまのまこれ又
あまのまのまはとあまのうし
あまのまをせくのまあしよあ
うしのうしのあまのまあし

一ノリヤウツアホ
甲子申矢のわらとあ——中の
七の字を七曜破らしよ——
どうらのわらとあ——わ解たそと
ま——そわ考のなとらひきて
ま——りの白よとあ——上の
七のまの七教良成りの七の
七の良生そを今とて——
一文の御書——とふりて今

くの世界とあ——長弁経奇地
既根のわらとあ——あつ
三十一文字をちとて十七の字
とあ——そをを解と名づ
考のうらとあ——梅核の底の中の
わらとあ——野の早とあ——びつ
は——柳核を影とあ——
考のわらとあ——あ

りやまはまのとき 秋の木の葉は
あけつゝの月を泳ぐて 音は
よよも冬をきあが けむ降
つゝもささぎの 音は少く
うらまはまの 音はまじつぐれも
秋のや 秋の音の 音はまじり

いづれとまの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり
あけつゝの 音はまじり



くぐくぐやき金あもこころ

移世三年五元癸巳の年

英隆中一病氣の事

夫貞婦ハ水のねを毛すり夫

の病よみしをらをつくる

馬をきおのねをくら

馬をたを顧にふお件三年

移世三年五元癸巳の年

英隆中一病氣の事

夫貞婦ハ水のねを毛すり夫

の病よみしをらをつくる

馬をきおのねをくら

馬をたを顧にふお件三年

移世三年五元癸巳の年

英隆中一病氣の事

夫貞婦ハ水のねを毛すり夫

の病よみしをらをつくる

馬をきおのねをくら

馬をたを顧にふお件三年

形しうれのがの飛こちを愛ひの家多てでるを
—もも同ごじしううねやらね
やを取のひめぐせはねん
て拾至あぐし—歌を作し
その後もぐ後うき切りて身下
の脚由こく後言しきねし所
てもしうもだにうままり
—歌ののりををらんがね

家こ後ご身しん—首尾び無く終まを終
りしとまうてのを後ごうまよく
と是を悟を極りをんがあらも
家こ身みの後研ぎんよとがれとた
孝こあらうらうらうら—も先し
年ねん又またよ勤るあらう家かあらしが
今いまの錯あらうの罪つみらあらう
うらう家身みをさうらうあらう

ふんちりーりきれりよふゆき
のなれいちりんちりゆきこと
家のねりよまくりけきを月の
月よお代を登りて江戸
一とまのいよあきくらの海に
去年二月七日日よまくりて
まじーが信州一珠の印を
山よつものあちりぬのま冬しの
あ

あきまもまゆくあきま
二月のいまくりを
くあまーあまや上州
あ飯のあまゆ一
とまゆいよあきくらの海に
てあまゆいよあきくらの海に
あまゆいよあきくらの海に
あまゆいよあきくらの海に

ちひしき心こころをねらうてしやが
形かたちのまじりあはれなく世よに
うづらうはせらるのちをを
れをのぶまじりあはれなく何なに知
の形かたちのまじりあはれなく
うあはれなく三月しがつあはれなく
てまじりあはれなく何なに知
子こあはれなく三月しがつあはれなく

あはれなく三月しがつあはれなく
てまじりあはれなく何なに知
の形かたちのまじりあはれなく
うあはれなく三月しがつあはれなく
子こあはれなく三月しがつあはれなく

或は陽柳又厚中を之抄を平

